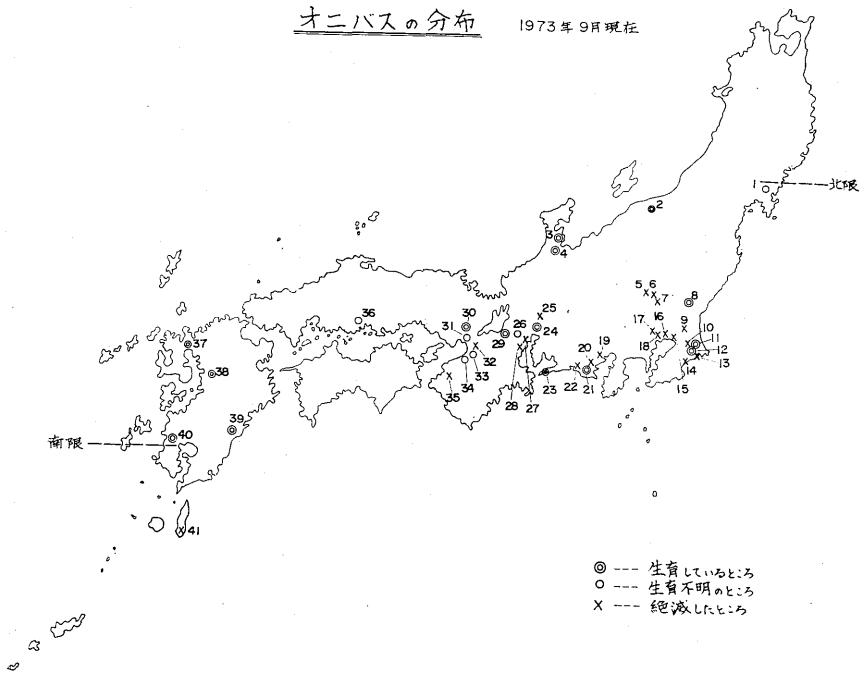


大滝末男*：日本におけるオニバスの分布

Sueo OTAKI*：The distribution of *Euryale ferox* Salisbury in Japan

最近、長田潔¹⁾と鈴木朝夫²⁾は千葉県のおニバスについて報告をしている。筆者はわが国におけるオニバスの生育現況を述べてみたい。図1と表1は1973年9月現在で、日本におけるオニバスの分布をまとめたものである。図1の中で、3, 4, 5, 6, 7, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 16, 18, 20, 21, 24, 28, 29, 32, 35 および 40 の池沼は、今までに直接筆者が現地を訪れて、オニバスの存否を確認したものであるが、他の地点については知人、植物

Fig. 1. The distribution of *Euryale ferox* Salisb. in Japan, Sept. 1973

* 東京都立小石川高等学校文京区本駒込 2-29. Koishikawa Senior High School, Honkomagome 2-29, Bunkyo-ku, Tokyo.

研究雑誌³⁾⁴⁾, 各府県の植物誌⁵⁾⁻¹⁰⁾ およびその他の資料¹¹⁾⁻²¹⁾ によった。

温帯から亜熱帯にかけて、1属1種で、しかもアジアの特産種²²⁾⁻²⁶⁾ であるオニバスは、昔から日本をはじめ、中国やインドにも多産し、体表に刺針が多いので、厄介視されてきた水草である。一般に、水草類は環境条件さえよければ、短期間に爆発的に大繁殖する性質があるので、オニバスのような大型一年生水草は、他の水草よりも邪魔もの扱いにされてきたようである。しかるに、第2次大戦後日本ではイネの増産、工業用水確保その他の目的から急速に進んだ池沼の干拓や埋立てなどにより、オニバスの生育する水域の減少は致命的となった。そのうえ、除草剤や家庭および工場排水などによる残された水域の水質汚濁やアメリカザリガニによる食害によって、一時は国内だけでも100か所を超えたオニバスの自生地が激減し、最近ではオニバスは珍しい存在となった。以下、オニバスの生育地について、近年、筆者が観察したことを述べ、稀少個種が出てきたオニバスの自生地の自然保護について、関係各方面の強力な対策を要望するものである。

除草剤が普及^{みずもと}しなかつた1960年頃までは、東京都葛飾区水元小合溜や群馬県館林付近の多々良沼・城沼・板倉沼・権現沼およびその周辺の水域では、オニバスはごくふつうに生育していたのを筆者は見ているが、現在では上記の地域では板倉町批把沼を除いた他は絶滅している。筆者は1967年8月に名古屋城および彦根城の堀に、1972年8月27日には、日本で分布の南限とされ、鹿児島県の天然記念物に指定されている小比良池とみやま池を訪れ、オニバスの存在を確認、ついで1972年8月30日には名古屋城の堀に多産しているオニバスを再確認している。一方、1971年までは、茨城県高浜付近の霞ヶ浦にオニバスが多産

表 1. オニバス分布所在地¹⁾ 表中の番号および記号は、図1のそれらに対応する。

○	1	鹿沼沼	宮城県亶田郡田尻町
◎	2	福島沼	新潟県北蒲原郡豊栄町
◎	3	十二町沼	富山県水原市
◎	4	高岡城の堀	富山県高岡市
X	5	多々良沼	群馬県館林町
X	6	城沼	群馬県館林市
X	7	板倉沼	群馬県板倉町
◎	8	千波湖	茨城県水戸市
X	9	霞ヶ浦	茨城県高浜町
X	10	手賀沼	千葉県我孫子市
◎	11	大石門沼	千葉県印旛村
◎	12	甚兵衛沼	千葉県印旛村
X	13	白沼山水	千葉県八日市場市
X	14	溜池	千葉県九十九里町
X	15	溜池	千葉県中川市
X	16	水元小合溜	東京都葛飾区
X	17	溜池	東京都北区赤羽
X	18	千忍池	東京都台東区上野公園
X	19	蓮華子池	静岡県藤枝市
X	20	大池	静岡県掛川市
◎	21	中新井池	静岡県大須賀町
X	22	高塚池	静岡県浜名郡可美村
◎	23	芦ヶ池	愛知県津美半島田原町
◎	24	名古屋城の堀	愛知県名古屋市中区
X	25	蛇池	愛知県名古屋市中区
○	26	溜池	岐阜県海津町
X	27	溜池	三重県多度町
X	28	溜池	三重県長島町
◎	29	彦根城の堀	滋賀県彦根市
◎	30	池尻中の池	京都府龜岡市
○	31	羽織池青池	大阪府豊中市
X	32	巨椋池	京都府宇治市
○	33	溜池	大阪府松原市
○	34	百舌鳥	大阪府堺市
X	35	和歌山城の堀	和歌山県和歌山市
○	36	溜池	広島県福山市
◎	37	佐賀城の堀	佐賀県佐賀市
◎	38	八代城の堀	熊本県八代市
◎	39	溜池	宮城県亶田郡木城町
◎	40	小比良池	みやま池 鹿児島県川内市
X	41	室満池	鹿児島県種子島

していたという情報を得たので、1973年8月26日、地元、県立江戸崎高校の後藤直和氏の案内で現地を調査したが、水質汚濁がひどく1株も発見できなかった。その後、彼は水戸市の千波湖に個体数は少ないが、オニバスの存在を確認したことを筆者に連絡してきている。

つぎに千葉県下のオニバスの現況をのべる。オニバスが多産しているので有名だった八日市場横須賀の白沼と三水という約3haの沼は1962年に水田化され、現在はオニバスが見られない。また、印旛沼北部の本埜村に点在する池沼に、以前はかなり豊富だったオニバスも1973年9月6日の調査では、外甚兵衛沼に数株と、内甚兵衛沼に約30株、および将監地区の太左衛門沼に100株ほど確認できた以外は、千葉県下の他地域では現在全く見るができない。幸い釣場で有名な内甚兵衛沼のオニバスは生育が良好で、葉の直径が2m余もあり、開花結実状況もよい。また、太左衛門沼のオニバスも1973年9月6日の調査では、葉は展開していたが開花は見られなかった。しかし、10月3日生嶋功氏の調査で開花結実状況が良好であることがわかり、今後の保護さえよければ、千葉県のこれらの池沼では当然オニバスが存続できるであろう。

終わりに、1973年8月30日に調査した静岡県小笠郡大須賀町大淵にある中新井池のオニバスを紹介する。この沼のオニバスは、まだ一般的には知られておらず天然記念物の指定もうけていなかった。情報提供者の県立浜松北高校の白井正己氏の案内で現地を訪れたが、中新井池は御前崎灯台と国鉄袋井駅とを結ぶ直線上の、ほぼ中間に位置し、長径約120m、短径約80mの広さの沼である。付近に人家は数軒しかなく、沼の周囲は小高い丘に囲まれ、汚水はほとんど流入していない。以前は水田の灌漑用水池として利用されていたが、現在では大井川の水を利用しているため、この沼の水は全然使用されていない。沼の水深は四季を通じて1~2mに保たれているという。水底は砂地やかたく、その上に腐植質の多い粘土層が10~20cm堆積している。水面のpHは英国製のWHATMAN-BDH試験紙で測定したところ6.5であった。この沼の水底の一部から湧水もあり、冬季でも水が枯れたり、凍結することがないというから、種子で越冬するオニバスの生育環境としては適当であると考えられる。調査した日には、中新井池のオニバスは、ヨシやマコモに囲まれた沼の西南部の約1/3の水面を被い、花が無数に咲いていた。約数百株はあったものと思われるが、よく発達した群落をつくり、この中に舟を進めることはとても不可能であった。葉がひじょうに密生しているため、成葉となっても水面に十分展開しきれず、大きい葉でもその直径は約120cmにとどまっていた。オニバスの生育していない水面は、おもにヒシで、僅かにトチカガミがあり、水中にはクロモが見られた。また、食用がえるのおたまじゃくしが沢山いたし、フナやメダカもいたが、オニバスの天敵であるアメリカザリガニを見つけることはできなかった。

なお、オニバスの花は午前10時頃開花し、午後2時頃には閉花するが、開花中の花

にハナアブが飛び廻っていたことは注目に値する。従来、オニバスは閉鎖花であるといわれているので、虫媒花でもあるか否かは引続き観察すべき今後の課題になるだろう。当日は、果実がすでに裂開して桃色の仮種皮が水面に浮上したり、葉上の上っていたので数十個の種子を拾うことができた。

帰路、早速白井氏と相談し、大須賀町役場に立寄り、岡本七郎教育長と面談し、早急に町または県の天然記念物の指定地に申請すべき重要性のあることを具申したところ、即刻快諾された。岡本教育長の言によると、昭和の初期からオニバスはあったという。国指定天然記念物である氷見市十二町潟のオニバスをはじめ、各地のオニバスの生育地が、絶滅の危機に直面している昨今、中新井池は日本におけるオニバスの自生地として、貴重な池と考えられる。その後、岡本教育長の努力により、1973年9月27日中新井池のオニバスは町の天然記念物に指定されたが、近年日本各地で急速にオニバスの保護に関心が高まってきたことは、まことに喜ばしい。

最後に、今回の調査ならびに、この文を草するにあたり、多くの方にご協力を頂いた。特に千葉大学助教教授生嶋功ほか、後藤直和、白井正己、上野雄規、今井清吾、鈴木俊夫、菅原亀徳、川村純二、浜島繁隆、小路登一、立花吉茂、島野好次、小松崎一雄、下泉正敏および浜田善利などの諸先生に対し深甚の謝意を申しあげる。

文 献

- 1) 長田 潔：オニバスの葉の成長と結実について、千葉生物誌 (1972)
- 2) 鈴木朝夫：印旛沼周辺のオニバスについて、千葉生物誌 (1973)
- 3) 岡田要之助：おにばすノ根茎，植研 3：(257) (1926)
- 4) 岡田要之助：おにばすノ葉，植研 6：(6) (1929)
- 5) 戸部正久：群馬県植物誌 (1968)
- 6) 千葉県生物学会編：千葉県植物誌 (1958)
- 7) 杉本順一：静岡県植物誌 (1967)
- 8) 北村四郎編：滋賀県植物誌 (1968)
- 9) 堀 勝：大阪府植物誌 (1962)
- 10) 熊本記念植物採集会編：熊本県植物誌 (1969)
- 11) 松沢篤郎：館林市邑楽郡植物誌 (1972)
- 12) 茨城県高校教育研究会生物部：特別地域自然財分布調査報告書 (霞ヶ浦・北浦・澗沼地区) (1971)
- 13) 桧山庫三：武蔵野の植物 (1965)
- 14) 脇田晴美：名古屋・尾張北東部の自然 (1959)
- 15) 伊藤武夫：近畿植物全観 (1965)
- 16) 愛知県高等学校生物教育研究会：愛知の植物 (1971)
- 17) 水野寿彦：水棲生物図説 (1958)
- 18) 馬場胤義編：佐賀県生物誌植物篇 (1964)
- 19) 鹿児島県理科教育協会：鹿児島県の自然 (1964)
- 20) 進野久五郎：滅びゆくオニバス，植物と自然 1 No. 3 (1967)
- 21) —：氷見市の十二町潟にオニバスの水郷公園を計画，植物と自然 7 No. 4 (1973)
- 22) 佐藤潤平：満州水草図譜 (1942)
- 23) 佐々木舜一：台湾植物名彙 (1928)
- 24) 裴鑑単人驪：華東水生維管束植物 (1952)
- 25) K. Subramanyam：Aquatic Angiosperms, India (1962)
- 26) 北村四郎・村田 源：原色日本植物

図鑑 (中) (1963)

Summary

Euryale ferox Salisbury, the only species known in the genus, is endemic to Asia. It was known to be rather widely distributed in Japan, from Miyagi Prefecture in the north to Kagoshima Prefecture in the south. However, based on my observation in September 1973, the species disappeared during the last twenty years at many localities marked with × in fig. 1 and table 1. In contrast, the species are well growing at 15 localities marked with ⊙, and are reported as living in several localities marked with ○.

□ 上野益三：日本博物学史 pp. 680+73 平凡社，東京。(1973) ¥ 4,800。1973 年にはいろいろの本が出た。その中で傑出したものとして私はこの本を推したい。いままで事博物学に関しては白井先生の日本博物学年表がほとんど唯一といってよい。それも出版以来大分年数を経たし、それに誤植もまゝある。それが今度全く面目を一新した形態で出版されたのであるからありがたいことであった。

本書は二部から成る。第一が日本博物学通史で 160 頁，第二が新撰詳注日本博物学年表で 473 頁である。前者は要領よくまとめられているが、とくに貝原益軒の大和本草の出版とその内容に重点をおいて近世を四つの時代区分をしたのは著るしい点である。即ち 1) 本草綱目輸入以前の時代。慶長 12 年 (1607) に林道春が入手，家康に提出したことを第一の区切りとする。2) プレ大和本草時代。凡そ一世紀で食物本草が大きく影響する。宝永 6 (1709) に大和本草が出版されて 3) ポスト大和本草時代に入る。採葉という天然資源の調査が盛んとなり，江戸に本草家が集まり，博物学的傾向が強くなる。4) 文政 6 年 (1823) にシーボルト来朝し，鳴滝学舎がひらかれ，こゝからシーボルト渡来以後の時代となるとする。

年表は本書の中軸である。細大もらさずに関係事項を挙げて明治 33 年日本博物学同志会の結成を以て終っているのは意味が深い。しかも個々の記事の外に関連事項が事細かに述べられていて大変に便宜である。たとえば著書の刊行があればその書誌的なデータの外に内容を載せ，人名があればその伝記を添付するの類であって，これは容易なことではなかったことと著者に厚くお礼を申述べたい。

なお墳墓録に 61 氏を収録し一々その墓の写真を添え，索引として人名，書名，一般事項を別々にのせる。ぜひ一本を備えておきたい。博物史中，どういうわけか年号に誤記がしばしばあるのがおしまれる。

(前川文夫)